

「川瀬巴水、作品と俳句」



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Nihon_f%C5%ABkei_sensh%C5%AB,_Shimabara_Tsukumojima_by_Kawase_Hasui.jpg

日本各地を旅し、日本的な美しい四季折々の風景を叙情豊かに描き、国内より海外での評価が高く、欧米では葛飾北斎、歌川広重と並び称される版画家川瀬巴水（かわせ はすい）＜ 1883 年（明治 16 年）－ 1957 年（昭和 32 年）＞。

「季語に遊ぶ」では前 12 回、美術と俳句の組み合わせを試みてきました。第 13 回の今回は『島原 九十九島（つくもじま）』『芝 増上寺』『日光街道』など眺めていると物語の一場面のような、懐しい郷愁に似た安らぎを感じさせてくれる川瀬巴水の版画と絵。そんな彼の作品を制作時期順に掲載し、その作品に合う俳句を選びました。なお、版画の大きさは大判おおむね長辺 36～39×短辺 24～29cm。間判はおおむね長辺 28～33×短辺 21～23cm です。お楽しみ下さい。

1. 「東京十二題」より『深川上の橋』



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:T%C5%8Dky%C5%8D_j%C5%ABnidai,_Fukagawa_Kaminohashi_by_Kawase_Hasui.jpg

1920年（大正9年） 木版画 大判 大田区立郷土博物館蔵

「上の橋は、深川の佐賀町から清住町へかけられた木橋です。時は夏の夕、夕闇の橋間の暗さが、入り日の光に相對（あいたい）して、好い感じを見せて居りました。大川を遅々として流れ行く帆かけ舟は、いつもながらの情景ですが嬉しく思ひます。向ふ河岸（かし）は中洲です。不調和な西洋館も見えません。此邊（このあたり）は北齋の『隅田川兩岸一覽』の當時（とうじ）がそぞろに想ひ浮べれます。」と『川瀬巴水 創作板画解説』にあります。

低い夕陽が反射する川面によって橋を浮かびあがらせる構図は、夏の夕べの郷愁をさそう抒情に満ちています。

巴水の作品は情緒豊かな江戸の景観を残す貴重な記録とも言えます。

ここでは、「橋桁」「橋脚」を詠んだ句を選びました。

橋桁や日はさしながら夕霞

立花北枝(たちばな ほうし) (生年不詳-1718)

季語<夕霞>で三春

橋脚を慕ふ漣十三夜 (漣=さざなみ)

毛塚静枝(けづか しずえ) (1920-没年不詳)

季語<十三夜>で晩秋

橋桁に嵌まる風景鯿を釣る (嵌まる=はまる、鯿=はぜ)

加藤三七子(かとう みなこ) (1925-2005)

季語<鯿>で三秋

2. 『十和田湖 神代ヶ淵』



<https://commons.wikimedia.org/wiki/File:%E5%B7%9D%E7%80%AC%E5%B7%B4%E6%B0%B4%E7%AD%86%E3%80%8C%E5%8D%81%E5%92%8C%E7%94%B0%E6%B9%96%E7%A5%9E%E4%BB%A3%E3%83%B6%E6%B7%B5%E3%80%8D.jpg>

1920年（大正9年）頃 二曲屏風 紙本着色 ジョン・C・ウェーバー・コレクション蔵

十和田湖は最大水深 326m で田沢湖（最大水深 423m）、支笏湖（最大水深 360m）に次いで日本で3番目に深い二重式カルデラ湖で、青森県と秋田県の県境に位置し、名はアイヌ語の「トーワタラ（岩の間の湖）」に由来します。

この絵は十和田湖にある神代ヶ淵（神代ヶ浦）を描いた作品で緑に覆われ、高くそびえる絶壁が画面中央に大きく描かれ、その下に小さく波打つ湖面が広がり、青空には大きな雲が浮かんでいます。画面中央左に白い帆かけ舟が小さく描かれていますが、これは今回取りあげていませんが、「旅みやげ第一集」の『十和田湖 千丈幕』などで描かれている白い帆かけ舟でしょう。透明感のある水面や奥行きのある描き方は洋画タッチの力作で、芸術性の高い超レアものの日本画屏風です。

ここでは「十和田湖」を詠んだ句を選びました。

十和田湖や幣の花かもななかまど（幣＝ぬさ、神に捧げる供え物）

渡辺水巴（わたなべ すいは）（1882-1946）
季語＜ななかまど＞で晩秋

十和田湖へ星飛びたりと便りせむ

阿波野青畝（あわの せいほ）（1899-1992）
季語＜星飛ぶ＞で三秋

梅雨に入る鱒の十和田湖光りつつ

山田みづえ（やまだ みづえ）（1926-2013）
季語＜梅雨＞で仲夏

3. 「旅みやげ第二集」より『大坂道とん堀の朝』



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Tabi_miyage_dai_nish%C5%AB,%C5%8Csaka_D%C5%8Dtonbori_n_o_asa_by_Kawase_Hasui.jpg

1921年（大正10年） 木版画 大判 渡邊木版美術画舗蔵

道頓堀川は、慶長 17 年（1612 年）から開削が行われ、大阪の陣などで一時中断もありましたが、元和元年（1615 年）に完成しました。水路の名は私財を投げ打って開削した安井道頓（やすい どうとん）（天文 2 年＜ 1533 年＞－元和元年＜ 1615 年＞）に由来します。寛永 3 年（1626 年）頃、大坂中の芝居小屋が道頓堀に集められ、以降芝居の本場として栄えました。道頓堀通の南側に芝居小屋、北側に芝居茶屋が並ぶ構造でしたので、現在も通の南側に娯楽施設、北側に飲食店が多くなっています。現在では喧騒のかたまりのような道頓堀ですが、この作品では朝霧の中静かな時間が流れています。

ここでは秋の季語である「霧」を詠んだ句を選びました。ちなみに霧は水蒸気が地表や水面の近くで凝結して微小な水滴となり、煙のように漂って視界を悪くする現象で、気象学では水平視程が 1km 未満のものをいい、それより見通しのよいものは靄（もや）といいます。霧は日本各地、一年中どの季節も見られますが、秋に最も多いことから秋の季語となったようです。それでは俳句をどうぞ。

霧吹けり朝のミルクを飲みむせぶ

石田波郷（いしだ はきょう）（1913-1969）

空の色うつりて霧の染まるかと

深見けん二（ふかみ けんじ）（1922-）

夜霧ああそこより「ねえ」と歌謡曲

高柳重信（たかやなぎ しげのぶ）（1923-1983）

4. 「日本風景選集」より『島原 九十九島 (つくもじま)』



[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Nihon f%C5%ABkei_sensh%C5%AB,_Shimabara Tsukumojima by Kawase Hasui.jpg?uselang=ja](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Nihon_f%C5%ABkei_sensh%C5%AB,_Shimabara_Tsukumojima_by_Kawase_Hasui.jpg?uselang=ja)

1922年（大正11年） 木版画 間判 渡邊木版美術画舗蔵

島原の九十九島は寛政4年（1792年）4月1日に起こった「島原大変」で島原の背後の眉山（まゆやま）の崩壊によって形成された島々です。

文化9年（1812年）の伊能忠敬の測量によると島の数は59でしたが、明治25年（1892年）では31、現在は16に減少しています。

島の景観を観光資源として生かすため、周辺には島原温泉を引きこんだ露天風呂があり、絶景を楽しむことができます。

巴水は九十九島の緑と舟を強調するよりは、パステルピンクに染まった入道雲とそれを映すパステルブルーの海と空を幻想的に描いています。

海辺の島々に訪れる夕暮れ前の光景を作者独得の日本の美観で描き切っています。

ここでは聳（そび）え立つ入道雲の威容を山並みにたとえていう夏の季語「雲の峰」を詠んだ句を選びました。

日本各地には積乱雲の発生しやすい地形があり、「坂東太郎」「信濃太郎」などがそれです。

京都では「丹波太郎」「山城次郎」「比叡三郎」などの入道雲が勢揃いします。

たのもしや西紅の雲の峰

小林一茶(こばやし いっさ) (1763-1828)

雲の峰練習船は南航す

高野素十(たかの すじゅう) (1893-1976)

薔薇色の雲の峰より郵便夫

橋本多佳子(はしもと たかこ) (1899-1963)

5. 「東京十二景」より『芝 増上寺』



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Kawase_Z%C3%B4j%C3%B4ji.jpg

1925年（大正14年） 木版画 大判 大田区立郷土博物館蔵

巴水の代表作の一つ。
雪の白と建物の赤のコントラストが鮮やかです。
雪の激しさを物語るように乱れ飛ぶ雪片の一つ一つの大きさが異なり、画面右上から左下に吹き付ける風雪の強さを、着物姿の女性が傘をつぼめて進んでいることから知ることができます。
増上寺は徳川家の菩提寺として隆盛を誇り、明治維新後、規模は縮小しましたが、それでも東京タワー建設時には、墓地の一部を提供しています。
巴水はこの作品で赤い建築物を背景に、白い雪を降らせ、添景（てんけい）に傘をさす女性を描き込んでいます。
このパターンは当時の愛好家の美意識と一致し、版画としては空前の 3000 枚を突破する売り上げを見せました。
以降、赤い建築物、雪、人物の構成の作品を多く描いています。

ここでは「雪」 + 「傘」を詠んだ句を選びました。

雪の傘たたむ音してまた一人

久保田万太郎(くぼた まんたろう) (1889-1963)

白妙の雪の傘さし人きたる

高橋淡路女(たかはし あわじじょ) (1890-1955)

雪の傘人美しと思ひけり

高木晴子(たかぎ はるこ) (1915-2000)

6. 『日光街道』



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Nikko_kaido_hasui_kawase.jpg

1930年（昭和5年） 木版画 大判 大田区立郷土博物館蔵

巴水は世界的にも有名な観光地であった日光の風景を季節、時刻に応じて構図を変化させ描いています。

本作では大木が茂った日光街道の杉並木ののどかな風景のなか、籠を背負った老婆を描いています。昼なお暗い杉並木の先に暑さが増す日向（ひなた）と遠景に積乱雲を描き、涼しさをもたらしてくれるであろう夕立を予感させてくれます。

遠近感と光と陰、見事な構成です。

ここでは、夏になって青葉が茂ったことを表わす季語「夏木立」を詠んだ句を選びました。

「夏木立」は複数の木をさし、一本の時は「夏木」といいます。

酒十駄ゆりもて行くや夏こだち（「駄（だ）」とは江戸時代、馬一頭に背負わされる荷物の重量の単位で、三十六貫（135kg）。酒は三斗五升入り（約 63L）2樽を一駄としていました。（出典）『丸善 単位の辞典』）

与謝蕪村（よさ ぶそん）（1716-1784）

天駆ける一颯ありぬ夏木立（颯＝ひょう、ぴょう。つむじ風、大風のこと。犬が風をまきおこしながら群がって走るさまを表した字。）

日野草城（ひの そうじょう）（1901-1956）

下に立ち見上げし杉や夏木立

星野立子（ほしの たつこ）（1903-1984）

私も『島原 九十九島』から発想を飛ばして詠んでみました。

エイトクルー裸に帽子雲の峰

白井芳雄

今回は「川瀬巴水、作品と俳句」をお届けしました。

全体を通じての参考文献、出典：清水久男監修

『別冊太陽 日本のこころ 252

川瀬巴水 決定版 日本の面影を旅する』（平凡社）(2017年)

ISBN9784582922523

西山純子著

『新版画作品集 なつかしい風景への旅』（東京美術）(2018年)

ISBN9784808711016

飯田龍太・稲畑汀子・金子兜太・沢木欣一監修

『カラー版 新日本大歳時記 愛蔵版』（講談社）

ISBN978-4-06-128972-7

『角川俳句大歳時記 新年』（角川学芸出版）

ISBN4-04-621035-4 C0392

『角川俳句大歳時記 春』（角川学芸出版）

ISBN4-04-621031-1 C0392

『角川俳句大歳時記 夏』（角川学芸出版）

ISBN4-04-621032-X C0392

『角川俳句大歳時記 秋』（角川学芸出版）

ISBN978-4-04-621033-3 C0392

『角川俳句大歳時記 冬』（角川学芸出版）

ISBN4-04-621034-6 C0392

本間美加子

『日本の365日を愛おしむ』（東邦出版）

ISBN978-4-8094-1652-1 C0076

参考サイト：フリー百科事典ウィキペディア (Wikipedia)

最後までお読みいただきありがとうございました。

(株)技術情報センター メルマガ担当 白井芳雄

本メールマガジンのご感想や本メールマガジンへのご意見・ご要望等 melmaga@tic-co.com まで、
どしどしお寄せ下さい。

株式会社 技術情報センター 〒530-0038 大阪市北区紅梅町2-18 南森町共同ビル 3F
TEL : 06-6358-0141 FAX : 06-6358-0134 E-mail : info@tic-co.com